

巻頭言

「コロナ禍の博物館と美術館」

理事長 新谷友良

楽しみにしていた東京国立博物館の特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」は、新型コロナウイルス感染防止のために中止になりましたが、緊急事態宣言の解除に伴い、博物館の施設が部分的に開館しています。ただ、入館にはオンラインによる事前予約（日時指定券）が必要で、1日あたりの入館者数は先着30名までに制限されています。

早速、オンライン予約をして、6月の終わりに常設展示を見に行きました。入場時に係員による連絡先の確認が行われ、これに加えて渡されたパンフレットに「入館時に検温を実施しております。37.5度以上の発熱が確認された場合、ご入館をお断りいたします」、「入館にはマスクの着用が必要です」、「手洗い及びアルコール消毒にご協力ください」、「他のお客様との間隔を2メートル以上開けてください」、「閲覧室内では会話をお控えください」など細かな注意事項が書かれています。

そんな中での常設展示の鑑賞でしたが、東京国立博物館で初めて経験する「あり得ない時間」でした。展示室にいる人はほんの数人で、心ゆくまで鑑賞する時間があり、時代を経た建物の匂いや、照明まで味わうことができました。数年前、全難聴福祉大会で奈良に行った折に、興福寺国宝館の「阿修羅像」の前で味わったと同じ至福の時間でした。見終わって、先の見えない不安・混乱の狭間にある、ほんの一時の平安という思いがしましたが、それでも心和む時間がありました。

ウイルス学の泰斗山内一也は「第二次世界大戦後、世界はめざましい発展を遂げてきた。その反面で、都市化や人口増加により環境破壊や温暖化が進み、大きく変動している世界にわれわれは生きている。20世紀後半、ウイルスは30億年にわたるその生命史上初めて、激動の環境に直面することになった。」と「ウイルスの意味論」に書いています。今回の感染拡大が、そのような地球環境の変化に対するウイルスの反応であることを頭で理解しつつも、ウィズコロナの生活がどのようなものかイメージできません。ただ30億年に亘って生物と共生を続けたウイルスは、宿主（人間）の生存を一方的に脅かすだけの存在ではないはずと思い、9月まで続く東京都美術館の「The UKIYO-E 2020 — 日本三大浮世絵コレクション」を早々オンライン予約し、鑑賞に行く落ち着かなさです。